

## 第4章 まとめ

### 第1節 明石川流域における古墳時代後期の古墳群について

#### 1. 水谷古墳群

第2章において今回確認された古墳の概略を記したが、この項では、これまでの調査で確認された古墳を含めて述べてみたい。

これまで水谷地区で発見された古墳の位置関係は fig. 50 の通りである。この図を見ると、水谷大東古墳周辺の調査トレンチでは、明確に古墳と判断されるものは確認されていないが、報告の中では、古墳時代の土器が出土する弧状の溝の一部を検出しており、これが古墳の周溝である可能性は否定できない。しかし、この古墳周辺に密集して多数の古墳が存在したとは考えにくく、むしろ、2～5号墳の辺りに、高密度で古墳が分布しているように見受けられる。

各古墳の諸元は fig. 48 のようになっている。これを見ると、(1)墳形の相違、(2)墳丘規模の相違、(3)埴輪の樹立の有無など明瞭に差異が認められる。古墳の築造された時期は出土した遺物からみて、水谷大東古墳と水谷2号墳が5世紀後半、3、4、5号墳が5世紀末～6世紀初頭と考えられる。水谷古墳群は概ね、5世紀後半から6世紀初頭の時期に築造された古墳群と考えて大過ないと思われる。

古墳の名称・番号	墳 形	墳丘規模	周 溝	埴 輪	出土遺物	参 考 文 献
水谷大東古墳(水谷1号墳)	帆立貝形	全長約20m、円丘部直径約15m、造り出し部長さ約5m、最大幅約5.5m	幅約3～4m、馬蹄形	円筒埴輪、形象埴輪(鶏形・人物・楕形)	須恵器、碧玉製管玉	「水谷大東古墳」平成8年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1999
水谷2号墳	方・または帆立貝形	東西辺11.5m	幅約3.5～4.3m	円筒埴輪、形象埴輪(馬形・盾形・人物・靱形)川西編年Ⅳ期	須恵器(樽形甕)	「水谷遺跡第7次調査」平成10年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2001
水谷3号墳	円	直径約10m	幅約2～4m	—	須恵器	本書掲載
水谷4号墳	方	一辺8m	幅約2～2.5m	円筒埴輪、形象埴輪(人物)少量出土	須恵器(樽形甕)	本書掲載
水谷5号墳	方	8.5×6.5m	幅約1m前後	円筒埴輪ごく少量出土	—	本書掲載
南山神古墳	—	—	—	円筒埴輪	—	本書に出土埴輪実測図掲載

fig. 48 水谷古墳群データ

fig. 48 に記された南山神古墳は、平成6年の試掘調査で発見された。ここでは周溝状の遺構から埴輪片が出土している。この古墳については水谷古墳群の推定範囲に接しており、同じ古墳群に属するものと判断される。

fig. 49 は南山神古墳から出土した埴輪である。34のようやや突出するタガを持つものや、35のように幅広の低い台形上のタガを貼り付けるものが認められる。外面にはわずかにハケ目調整が残存し、内面には指頭圧痕が見られる。35には円形の透かしの一部が残る。いずれも、黄白色を呈し、焼成状態は悪い。

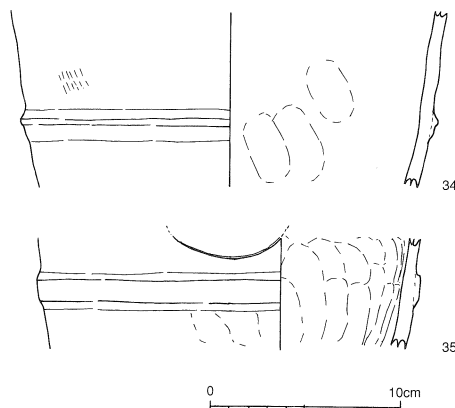


fig. 49 南山神古墳 出土埴輪

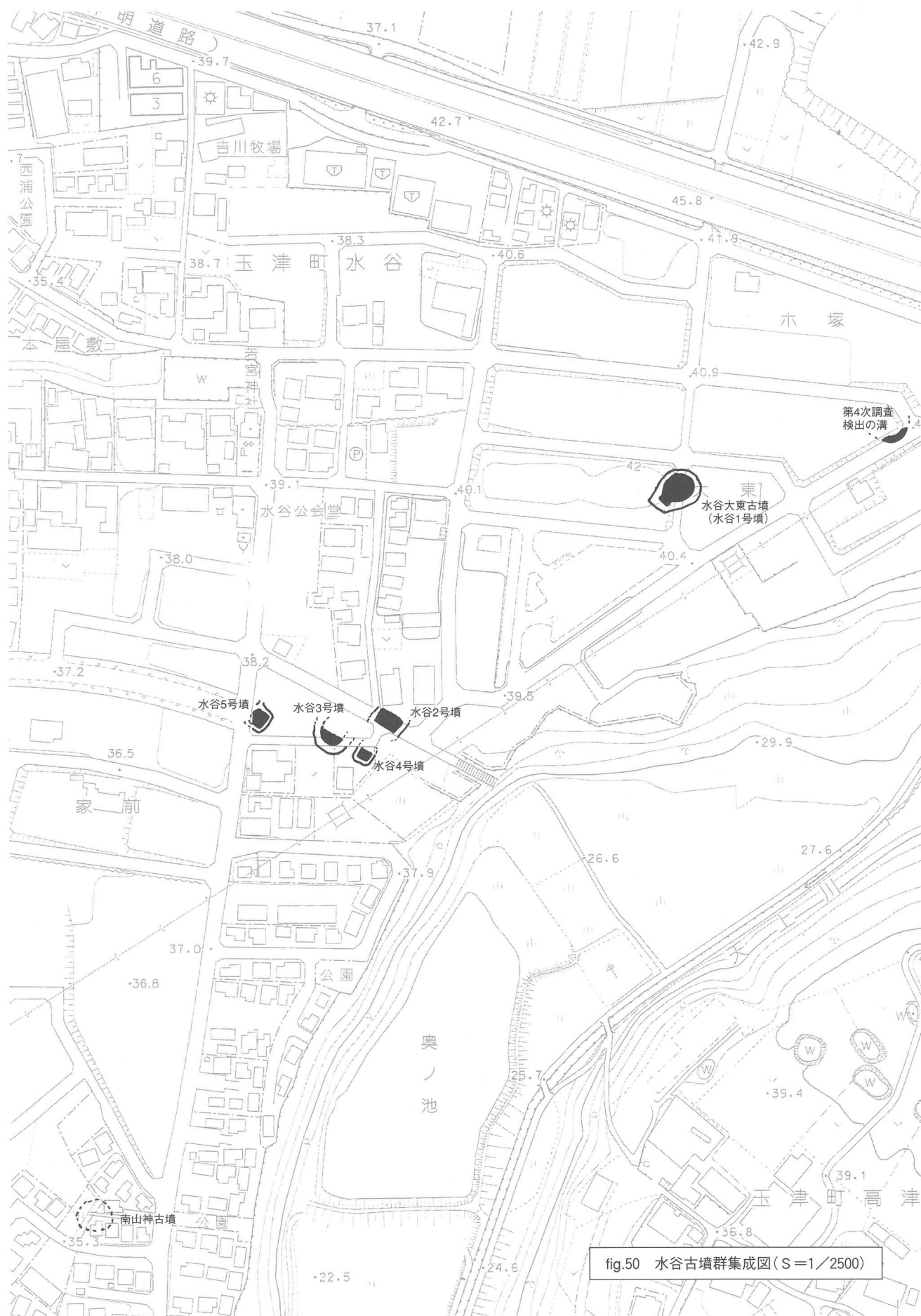


fig.50 水谷古墳群集成図 (S=1/2500)

以下で、水谷古墳群の特徴を述べておきたい。

- (1) 墳形：帆立貝形（水谷大東古墳）、方墳（水谷2、4、5号墳）、円墳（水谷3号墳）などがある。
- (2) 墳丘規模：全長20mの水谷大東古墳と直径・一辺10m前後のもの（水谷2～5号墳）に大別される。
- (3) 埴輪の樹立の有無：水谷大東古墳は、周溝外側に埴輪列が検出された。また周溝内から、多くの円筒・形象埴輪が出土した。水谷2号墳も周溝内から複数の形象埴輪が発見され、墳丘上に樹立していたと推定される。3号墳では埴輪は全く出土せず、埴輪の樹立していた可能性は低い。また、4・5号墳ではごく少量しか出土しなかった。これらの埴輪は、周辺の古墳からの流れ込みか、または古墳墳丘に少数の埴輪が樹立されていたと思われる。

このような差異が何を表わすかについては、意見が分かれるところであろうが、当時の階層差を反映するものと解釈するのが妥当であろうと考えられる。

水谷古墳群では、すべての古墳を調査していないので断定はできないが、水谷大東古墳の築造を契機として、2号墳以下の古墳が順次造られたと考えられる。古墳の築造期間は、先述の通り5世紀後半から6世紀初頭ごろまでの比較的短い間のようなものである。水谷大東古墳の被葬者とその他の古墳に葬られた人との関係は、明確ではないが、この地域（明石川の支流である伊川下流域）の小首長と、それを支える集団の主だった人々の墳墓であるとみるのが妥当であろう。

## 2. 明石川流域の後期前半の古墳と集落址

明石川流域の前期の古墳は、伊川流域の天王山4・5号墳<sup>(1)</sup>、明石川中流域の堅田神社1号墳<sup>(2)</sup>などが代表的で、古墳の数はきわめて少ない。これらはすべて方墳または長方墳で、前方後円墳は確認されていない。

前期末～中期初めに、伊川流域には瓢塚古墳<sup>(3)</sup>が出現する。これは全長約57m、後円部径33m、前方部長28mの前方後円墳で、断面楕円形の埴輪列が並ぶ。平成15年度の発掘調査では粘土槨の主体部から碧玉製車輪石、石釧や画文帯神獣鏡、鉄剣、ガラス玉等が出土した。

中期前半には、明石川下流域に王塚古墳<sup>(4)</sup>（全長74m、後円部径44m、前方部前端幅42m、鍵穴形の周濠を持つ）が築造される。明石川上流域にあたる神出町の金棒池古墳<sup>(5)</sup>（1号墳）は前方後円墳といわれているが、土取りによって損壊されており、時期などの詳細は不明である。

明石川流域で、古墳が著しく増加するのは、古墳時代後期初め頃（5世紀末～6世紀初頭）である。この段階で流域各地に直径10m内外の円墳が、主に丘陵・段丘上に築造される<sup>(6)</sup>。

これらの古墳の内部主体は木棺直葬で、周溝、墳丘裾または、主体部内に土器、ガラス系の装身具、鉄製品（鉄鎌、鉄刀）を副葬するものが多いが、甲冑を埋納するもの<sup>(7)</sup>は1例を除いてない。古墳の時期は出土した須恵器からみて、田辺編年<sup>(8)</sup>のTK23～47、MT15、TK10型式の段階を中心に営まれるようである。

また、この時期に明石川流域では前方後円墳は築造されないが、円形の墳丘に短い造出しが付属する帆立貝形古墳<sup>(9)</sup>が数カ所で確認されている。これらは、明石川中・下流域および伊川流域で発見され、現在の段階では、明石川上流域、櫛谷川流域では確認されていない。これらの帆立貝形古墳の概要はfig.51のとおりである。

古墳の名称	所在地	全長(m)	円丘部直径(m)	造出長さ(m)	造出幅(m)	周溝	埋葬施設	出土遺物	時期
水谷大東古墳	西区水谷	20.5	15	5	6	馬蹄形	不明	須恵器・埴輪	5世紀末～6世紀初
天王山3号墳	西区天王山	25	20	5	10	一部あり	木棺直葬?	〃	〃
出合亀塚古墳	西区中野	29	20	9	13.4	馬蹄形	不明	〃	〃
中村5号墳	西区平野町印路	16.3	14	2.3	4.7	—	木棺直葬2基	〃	〃

水谷大東古墳現地説明会資料(1996.5.19)掲載の表より数値引用  
fig. 51 明石川流域の帆立貝形古墳一覧表

fig.52は古墳時代後期前半頃（5世紀末～6世紀前半）と考えられるTK23～47、MT15型式の段階（一部TK10を含む）の遺物が出土、または採集された古墳・古墳群（黒丸または鍵穴形の記号）および当該時期の集落（楕円形）を表わしたものである。

流域名	番号	古墳・古墳群名称	記号	遺跡名	流域名	番号	古墳・古墳群名称	記号	遺跡名
明石川上流域	1	押部古墳群	A	栄遺跡	明石川中流域2	16	印路古墳群	F	印路遺跡
〃	2	緑ヶ丘古墳群	B	押部遺跡	〃	17	下大谷古墳群	G	玉津田中遺跡
〃	3	〃	C	福住遺跡	〃	18	中村古墳群		
〃	4	日吉谷古墳群	D	西盛南遺跡	〃	19	慶明寺古墳群		
〃	5	広野古墳群			明石川下流域	20	亀塚古墳	H	出合遺跡
〃	6	道心山古墳群			〃	21	王塚古墳	I	吉田南遺跡
〃	7	金棒池古墳			櫛谷川流域	22	松本古墳	J	西神ニュータウン第62号遺跡
〃	8	新内古墳			〃	23	池谷古墳群	K	栃木遺跡
〃	9	七曲り古墳群			伊川流域	24	水谷古墳群	L	新方遺跡
明石川中流域1	10	西神ニュータウン第18,19,20号墳	E	常本遺跡	〃	25	高津橋大塚古墳	M	白水遺跡
〃	11	堅田神社古墳群			〃	26	瓢塚古墳	N	寒鳳遺跡
〃	12	西神ニュータウン第29～33号墳			〃	27	天王山古墳群	O	上脇遺跡
〃	13	西神ニュータウン第41,42号墳			〃	28	鬼神山古墳群		
〃	14	常本古墳群			〃	29	池ノ内古墳群		
〃	15	保養所裏山古墳群			〃	30	柿谷古墳群		

fig.52 明石川流域の後期前半の古墳と集落址一覧表

分布状況を観ると、これまでの研究成果<sup>(10)</sup>で既に述べられているように、明石川上流域・中流域・下流域、伊川流域、櫛谷川流域<sup>(11)</sup>というそれぞれのまとまりに大別ができることは、動かせないものと判断される。以下それぞれのグループの特徴を略述する。

#### ①明石川上流域

押部谷町、神出町から三木市の一部に分布するグループである。丘陵部の古墳群の多くは、過去の団地造成工事によって、消滅しており、詳細は判らないものが多いが、地元の研究者の記録やわずかに残された遺物などによって、木棺直葬墳が多く、埴輪を持つ古墳があるということである。神出町の高位段丘面縁辺部には、既述の前方後円墳といわれている金棒池1号墳や、墳丘は削平されていたが、直径17mの円墳である新内古墳<sup>(12)</sup>がある。なお、この周溝内からは円筒埴輪、人物埴輪が出土している。

集落址は、河岸段丘上に成立した西盛南<sup>(13)</sup>、福住<sup>(14)</sup>、押部<sup>(15)</sup>の各遺跡で当該時期の遺構、遺物が発見されている。

#### ②明石川中流域1

押部谷町の一部、平野町の北半部に位置するグループである。現在の西神ニュータウン内に存在した古墳群も、その中に含む。今までに確認されている古墳はすべて丘陵上にある。明石川右岸には、常本古墳群<sup>(16)</sup>や保養所裏山古墳群<sup>(17)</sup>がある。これらは発掘調査が行われていないため、詳細は不明であるが、埴輪を有する古墳があるようである。左岸には堅田神社古墳群<sup>(18)</sup>を初めとする西神ニュータウン内の古墳群<sup>(19)</sup>が1基～6基程度のまとまりを成して尾根上に点在する。直径10m前後の円墳で構成され、ごく一部を除いて埴輪は持たない。

集落遺跡は、発掘調査で確認されているのは、常本遺跡<sup>(20)</sup>だけであるが、明石川左岸の平野町繁田・堅田、押部谷町養田<sup>(21)</sup>付近に当該時期の遺跡が存在すると思われる。

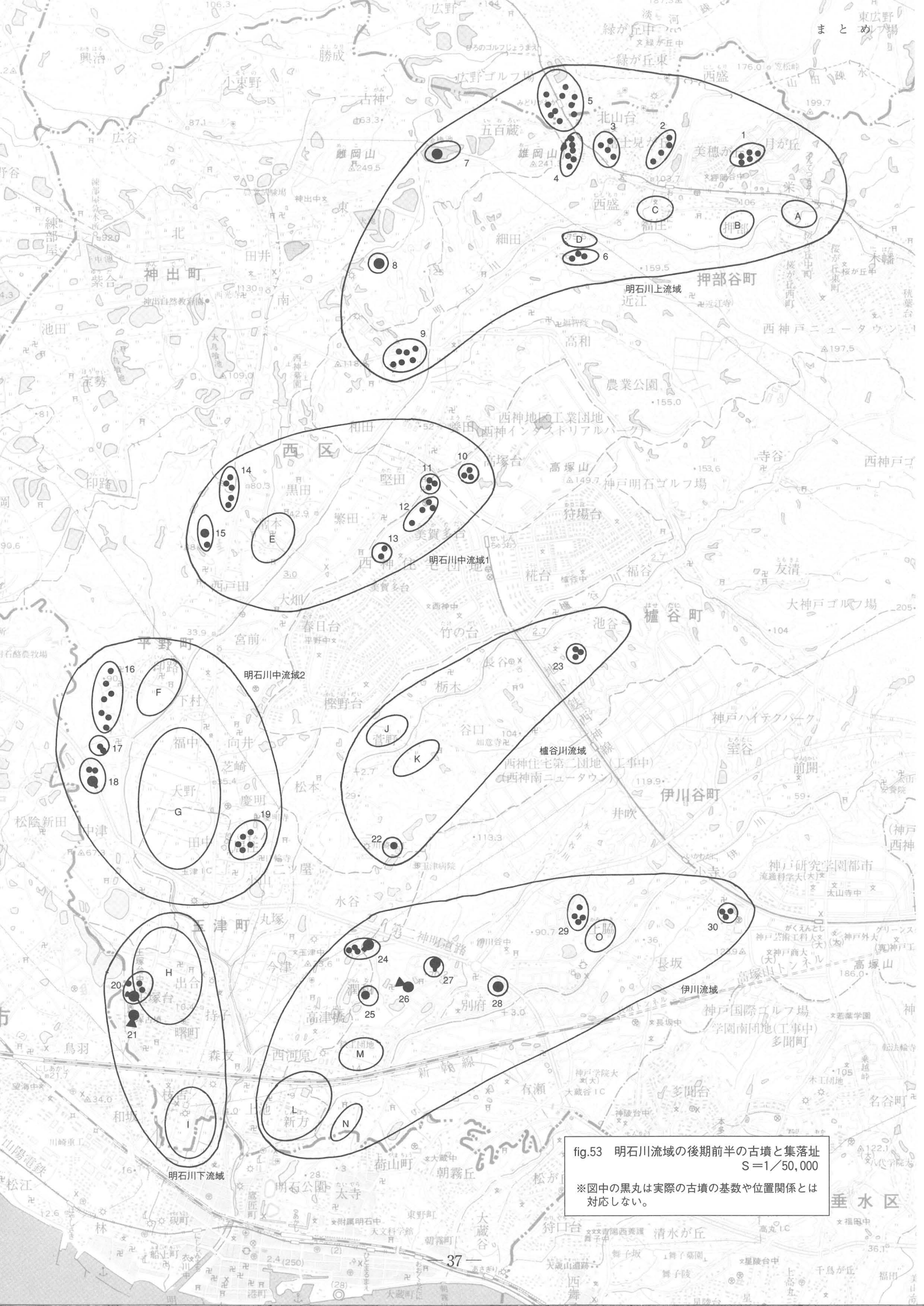


fig.53 明石川流域の後期前半の古墳と集落址  
S=1/50,000

※図中の黒丸は実際の古墳の基数や位置関係とは対応しない。

### ③明石川中流域 2

平野町南部、玉津町の一部を含む地域である。明石川右岸には帆立貝形古墳の中村 5 号墳<sup>(22)</sup>が発見されている。また、北側の丘陵上には印路古墳群<sup>(23)</sup>や、金属製の勾玉が出土した下大谷古墳群<sup>(24)</sup>がある。左岸には尾根上に慶明寺古墳群、段丘上には、その支群と考えられる居住・小山遺跡内で発見された、墳丘を削平されて周溝のみ残存した古墳<sup>(25)</sup>などが分布する。

集落址は右岸には韓式系土器が出土した印路遺跡<sup>(26)</sup>、左岸には、弥生時代から継続的な、拠点集落のひとつと想定される玉津田中遺跡<sup>(27)</sup>が占地している。

### ④明石川下流域

明石川右岸の玉津町南西部の地域である。王塚台には、5 世紀前半の前方後円墳である王塚古墳<sup>(28)</sup>がある。また同じ段丘上からは、墳丘が削平された帆立貝形古墳の亀塚古墳<sup>(29)</sup>が発見され、さらに周辺からは小規模な方墳・円墳など 4 基が調査されている。

集落遺跡には、初期須恵器や陶質土器、韓式系土器が多く出土し、渡来系氏族の居住した可能性が高い出合遺跡<sup>(30)</sup>や弥生時代後期から継続する集落である吉田南遺跡<sup>(31)</sup>があり、有力な勢力の存在が想定される。

### ⑤櫛谷川流域

この地域での古墳の調査例が少なく、その実態は明らかになっていない。埴輪を持つ池谷古墳群<sup>(32)</sup>、箱式石棺が出土したといわれる松本古墳<sup>(33)</sup>などが挙げられる。未調査の古墳群もいくつか認められるものの、基数はそれほど多くないと推定される。

集落址は櫛谷川右岸菅野付近には西神第62号遺跡<sup>(34)</sup>、その対岸の栃木遺跡<sup>(35)</sup>などで確認されており、中流域の段丘上に集落が営まれていたようである。

### ⑥伊川流域

伊川右岸の丘陵部には、既述の八禽鏡や箱式石棺を持つ 4 世紀前半の天王山 4、5 号墳、明石川流域で初めての前方後円墳とされる瓢塚古墳が築造されるなど、早い時期から有力な古墳が出現する地域である。5 世紀後半以降、水谷大東古墳<sup>(36)</sup>とその周辺の小古墳、天王山 3 号墳と 1・2 号墳<sup>(37)</sup>などといった帆立貝形古墳とそれに伴う小古墳が築かれる。

また、乱掘によって遺物が持ち出され、緊急調査を実施した鬼神山古墳<sup>(38)</sup>では、2つの棺から出土したと推定される変形獣文鏡、銅釧、杏葉、鏡板、鉄刀、玉類、須恵器などの出土品があり、6 世紀初頭のものやや時期が下るものがある。墳形は明らかではないが、円墳または帆立貝形古墳の可能性が高い。

水谷古墳群が分布する段丘の谷を隔てて、やや南に下がるところには、高津橋大塚古墳<sup>(39)</sup>がある。この古墳は、後世の開墾などで、墳丘がほとんど削られており墳形は判らないが、礫敷粘土床の主体部からは振文鏡や滑石製の玉類が発見された。付近の緩斜面からは碧玉製の管玉や円筒・人物・盾形・家型埴輪などの遺物や古墳の周溝の一部を想定させるような溝が確認されている。

伊川を遡った左岸尾根上には、3 基の古墳からなる柿谷古墳群<sup>(40)</sup>があり、その内の 1 号墳は直径 14m の円墳で、埴輪列が確認された。また、形象埴輪も出土している。礫床上の木棺内からは、鉄剣・鉄鏃が発見された。6 世紀初頭の古墳であろうと推定される。

明石川と伊川の合流点付近には、弥生時代に前・中期の拠点集落で、古墳時代中・後期には玉製品を作る工房が存在した新方遺跡<sup>(41)</sup>、伊川左岸の段丘上に位置する寒鳳(かんぷう)遺跡<sup>(42)</sup>、水谷古墳群の南 1 km 付近にある白水遺跡<sup>(43)</sup>、伊川をやや遡った右岸には、上脇遺跡<sup>(44)</sup>とそれに付随するように丘陵上に立地する池ノ内古墳群<sup>(45)</sup>などが調査されている。



### 3. 古墳時代後期前半の小首長墳

前項で述べた、古墳時代後期前半の古墳と集落址の関係でみると、ほぼ集落址と古墳群が対応して形成されており、それぞれの墳墓を造営した集団がそれぞれの集落址の人々であることを、想定することは誤りでないと思われる。

とりわけ、③明石川中流域2、④明石川下流域、⑥伊川流域には帆立貝形古墳が発見されており、その近辺には小古墳群が附属している状況が窺え、これからみて、第1項で述べた墳形や墳丘規模、埴輪の有無などから、これらの古墳の被葬者の間には階層差があると解釈することができる。

一般に畿内では古墳時代中期の段階で、すでに地域の首長の墳墓は前方後円墳ではなく、帆立貝形古墳や方墳、円墳などを営むものが多くなるという<sup>(46)</sup>。明石川流域では、5世紀前半には、鍵穴形の周濠を持つ前方後円墳である王塚古墳が築かれるが、次代には続かず、しばらくの空白期間の後、5世紀後半から6世紀初頭の段階で明石川流域の各所に帆立貝形古墳が築造され、小型の円・方墳とともに群を構成しているということが明らかになっている。

なぜ、この段階に古墳が激増したのであろうか。それは以下のような想定がなされる。瓢塚古墳や王塚古墳を築き、または葬られた首長たちのように、明石川とその支流を代表<sup>(47)</sup>してヤマト政権と結び、ごく限られた人物のみ前方後円墳に葬られるということが行われなくなり、流域のいくつかの小首長が、それぞれ個別にヤマト政権と交渉をもった可能性があるということである。5世紀中頃から、ヤマト政権は地域の中小首長と直接的に手を結ぶことを、積極的に推し進める政策<sup>(48)</sup>を進めたとされており、この政策のあり方は、明石川流域の状況と合致するのではないかと考えている。

しかしそれらの関係は、伊川流域では、水谷大東古墳⇒天王山3号墳⇒鬼神山古墳という小首長墳の順序が追えるのに対し、③明石川中流域2、④明石川下流域では、現在のところ帆立貝形古墳がそれぞれ1基ずつしか確認されていないところからみて、必ずしも持続的なものではない可能性が高い。

以上要約すると、5世紀後半から6世紀初頭の明石川とその支流には、複数の小首長が存在し、いくつかのムラを統禦していた。それらの小首長が個別的に、ヤマト政権またはそれに直属する人々との関係を持っていたと思われる。その親疎・貢献の程度に応じて、一部の小首長の墳墓に帆立貝形古墳が採用され、渡来系の人々が来住<sup>(49)</sup>したのであろう。その小首長墳とともに、配下のムラの有力者または小首長の親族<sup>(50)</sup>が、付近の小規模な円墳・方墳に葬られるようになったと想定するのが妥当と思われる。しかしこれらの古墳群の基数をみても、数基から十数基程度であり、多くの古墳が密集しているようではなく、それほど大きな結集力を持った集団を想定することは難しいと判断される。

### 4. 住吉宮町古墳群との比較

5世紀後半～6世紀前半頃の古墳群としては、六甲山南麓に位置する神戸市東灘区に、住吉宮町古墳群が存在する。その特徴を既刊の報告書<sup>(51)</sup>を基に要約すると、以下のとおりである。

- ①この古墳群は扇状地末端の微高地上に立地し、元住吉神社付近を中心とする東西600m、南北250mの範囲に分布する。
- ②これまでに70基以上の古墳が発見されており、全長推定57mの前方後円墳とされる坊ヶ塚古墳と全長23mの住吉東古墳を中心に、一辺2～20mの方墳群と、低いマウンドまたは墳丘を持たない箱式石棺墓群から構成される。時期は田辺編年のTK208～TK10型式（5世紀中頃～6世紀中頃）の須恵器が出土するが築造のピークはTK23～TK47ぐらいの時期（5世紀後半～末）である。
- ③一辺10m前後の方墳が最も多い。規模の大きなものほど古く、新しくなると縮小する傾向がある。

- ④後世に埋葬施設が削平されているものも多いが、木棺墓、箱式石棺墓、土器棺墓が確認されている。埋葬施設の中には鉄剣・鉄刀・鉄鏃などが収められているものが多い。
- ⑤外部施設としては、墳丘コーナーに葺石、または大き目の石を並べる隅石を施すものや、墳丘平坦面の縁辺部に沿って列石を行うことが特徴的である。
- ⑥埴輪を持つ古墳は少なく、形象埴輪を持つものも限定されている。川西編年のⅤ期のものが多い。
- 共伴する須恵器は、TK23型式の新しい段階までである。

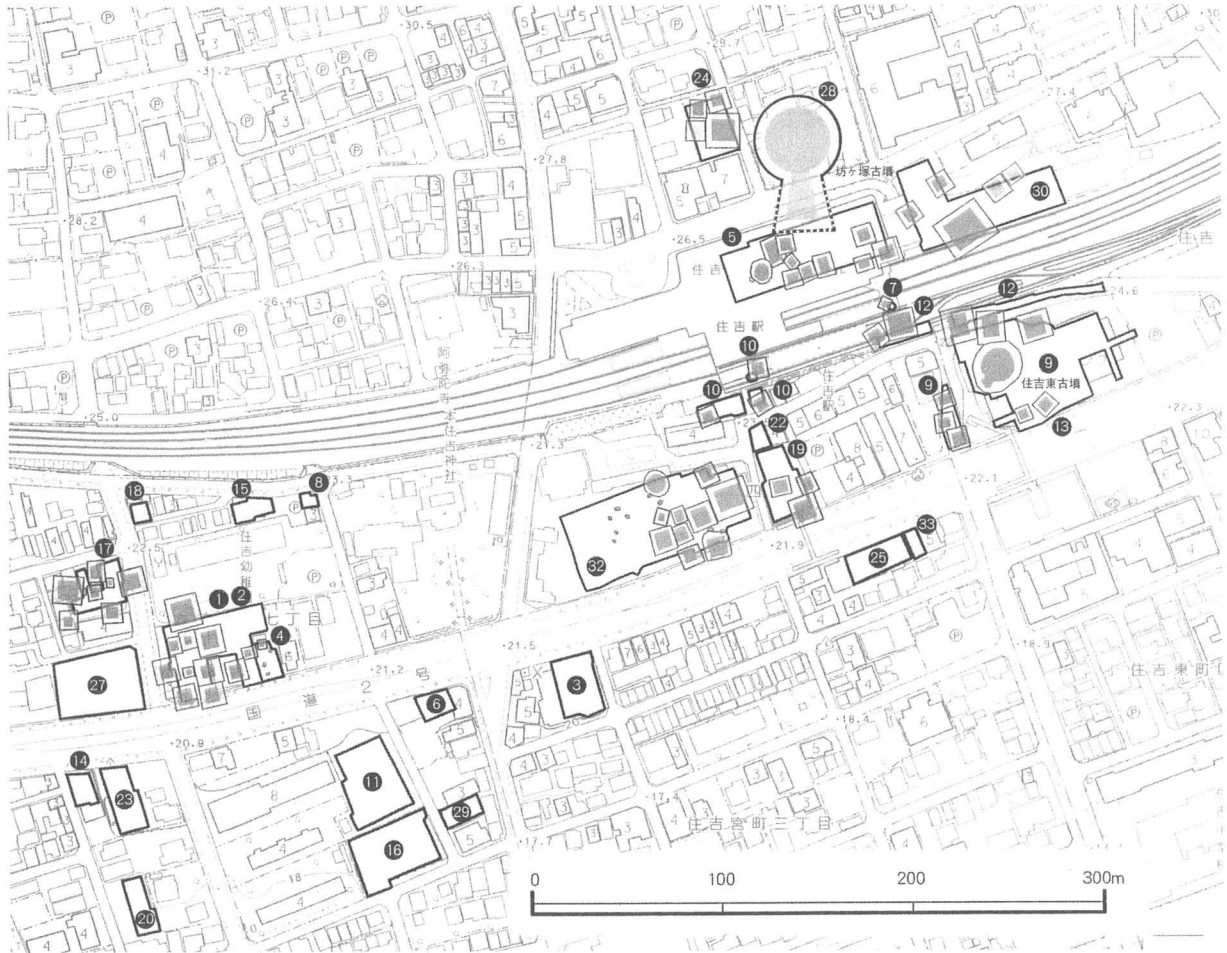


fig.54 住吉宮町古墳群全体図（参考文献 51 より引用）

以上を明石川流域の古墳群と比較してみても、明確に違うのは、その発見された基数と密度、立地である。また、前方後円墳、帆立貝形古墳、方墳という墳形の多様性<sup>(52)</sup>、また、小型の古墳のすべてが方墳であるという規格性などがあげられる。これらの点から、住吉宮町古墳群の首長墓のもとに結集され、葬られた人の多さ、言い換えれば、首長の勢力規模の大小が自然と浮かび上がると言えよう。

同様の古墳群は、大阪市長原古墳群<sup>(53)</sup>のように河内平野にも見られる。この古墳群は、大陸の先進的な生産技術をもって、あるいは原初的な官僚として、ヤマト政権と深く結びついた集団の墳墓<sup>(54)</sup>群と解釈されている。

住吉宮町古墳群の被葬者達は、ヤマト政権とどのような関わり方をしていたかは不明であるが、長原古墳群の被葬者たちと同様に、大王またはそれに直属する集団と密接な関係にあったことは想定できる。

以上から、明石川流域の古墳群については、六甲山南麓に位置する住吉宮町古墳群と比較して、一群あたりの基数が少なく小規模であり、また流域各所に分散することなどから、墳墓を紐帯とする結合の範囲は六甲山南麓と比較して狭小であり、大きな結集力を持った集団は想定しづらいと言わざるを得ない。